

「まちづくりと人づくり」

柴田 いづみ

環境建築デザイン学科

●はじめに

1996年4月、滋賀県立大学に赴任。在職中の17年間は、IT環境が一気に変わっていった。1996年の冬、ロンドン留学中の主人の事務所と井手慎真司先生の研究室間をPCにつけたカメラで繋ぐ実験をしたが、一瞬の画像であった。今は、Skypeで簡単に世界と通じてしまう。MLもACT（後述）のできた1998年10月には、まだ社会に広まっていなかった。学生や市民とで構成したACTnetは、滋賀県で一番最初のMLであるといえると思う。MLによって活動内容を共有し、広報にも使うツールを得ていった。現在のフェイスブックほど広範囲では無いものの、意見のしっかりした論議がACTnetの強みであった。14年半たった今でも活きている。これをACTの当初の理念「まちづくりと自己実現」のツールとして再活性化しようと考えている。

●建築と環境

1978年-82年のフランス留学から帰国し、最初の仕事は、フランス政府の日本校「リセ・フランコジャポネ」であった。コンペでは1位になったものの、建て替えが実施されなかったが、その後、フランス大使館職員用集合住宅のコンペに招聘され1位となりこれは実施された。この時に、「敷地だけを捉えるのではなく、周辺全体としての環境を価値として考える」理念を施主であるフランス大使館（フランス政府）にも周辺住民にも伝えてきた。現在前面の歩道は、フランス政府の土地であり、木々は大使館内の塀の中にあつたものをそのままにして、塀の位置を内側にずらして歩道としている。歩道上空地の事例が、まだ日本に見られない時期であるだけに大使館だけでなく、フランス政府、区、麻布警察、周辺住民に説明して周り合意を取り付けた。ちなみに敷地内の樹木は20m以上の木々も全部移植できたことは、以後のランドスケープの設計上、大きな自信となった。この敷地内部だけでなく、周辺も含めて将来像を描く姿勢は、今まで実施してきたすべての作品について共通している。樹木に対しては、常に「緑化計画一石七鳥」を提唱している。

●駅：土木と都市スケール

3つの駅、駅周辺計画が実施に至っている。福岡県の行橋駅、福島県の矢吹駅、滋賀県では近江鉄道



の高宮駅である。最初の設計は行橋駅で、駅部だけでなく3kmに及ぶ連続立体高架橋を景観設計している。当時、土木、建築、運行、電気と部門ごとに基準寸法が違い、それら部門全体での円卓会議を開催する事によって、JR九州全体の合意を、さらに福岡県、行橋市との合意をまとめて完成させた。合意のイメージは「やさしいモンスター」で留学時代にポンピドゥー・センターで開催された「駅の時代」に展示されていたロビネ

作の絵画に、私が勝手に命名した。高架橋は町を分断する可能性があるため、大きくても町・街・まちをまとめる意味での命名である。

矢吹駅は、電車の線路の上を東西に繋ぐ橋梁の上に駅がある橋上駅である。この橋梁は楕円柱が2本並ぶ形態をしている。西口は旧市街が迫っていて駅前広場を創れない為、この2本の楕円の大架構の下を舞台としての広場とした。東北本線の夜行と貨物が通る為、大架構工事の工事時間が限られており、終電から始発の前後1時間づつ通電検査の為に工事ができない。実質3時間ほどであった。橋梁にあたる部分を地組みとし、真夜中にクレーンで下半分を吊り上げ、すばやく柱に連結した。宇宙船を見ているようで壮観であった。東口は、市が広場予定地を取得していた為、カスケードのある広場は観客席となり、駅の階段の踊り場は舞台となった。水は農業用水で、夏場は噴水としても使える許可をもらった。羽鳥湖から農業用水をひく事は地元の悲願であつたらしく、昔、苦勞して用水嘆願をした老人の方が躍動する水をととても喜んで下さつた。



●2つの追悼展

2002年8月3日、内井昭蔵先生が急折された。内井昭蔵先生追悼会を提案し、学科会議で教員の担当を決め実施する事となり、追悼展と追悼の会を学生達とすすめていった。コアメンバーはACTの2代目代表三木雄也君を中心としたACTメンバー



で、ACT Stationのブースづくりの経験が役にたち、4つのブースを円に置いて、中を内井先生の人となり先生との教育のことは、外側を先生の作品の展示とした。当時の日本建築学会長の仙田満先生から東京の学会での展示を招聘された。木箱を運ぶわけにはいかないので、新たに鉄の輪とテントで円柱の展示ブースを創り、三田の建築会館の中庭のテント屋根から吊るし、大学での追悼展の報告展示は建築会館ギャラリーで、先生の作品展は、ホールの壁を使い、中庭を囲んですべての展示が一体となるように計画した。

2009年11月14日、初代学長の日高先生が亡くなられた。1期生の西谷智行君が滋賀県で3人しかいない火薬を取り扱う事のできる花火師で、すぐ西谷君にお願いして先生に花火を贈ることにした。そこで、先生を慕う学生、OB/OG、教員、市民で、「日高先生に花火を贈る会」を結成し、先生を偲んでのシンポジウムと書籍によって構成された展示会を開催した。

●災害と復興支援

阪神淡路大震災の起きた1995年当時、兵庫県の都市計画委員をしていた。東京で地震の事を知ったのは来客からの「関西で大変な地震が起きている！」という言葉で、急いでTVを付けた。火の手がいたるところに上がっている神戸の町の空撮だった。急いで兵庫県庁にFAXで、「遠隔地からでも支援できる事は何でも伝えて欲しい。」とみなさんの安否確認と共に送った。3日ほど経って、電話をいただき、1月末、代替えバスを乗り継いで県庁に行ったが、みなさん徹夜続きの復興計画中であった。縁があって、長田の復興リーダーの東さんと知り合った。東さんは、まずは商売の場所が必要とテントマーケット「パラール」を建てた計画者である。東氏は、駐車場の場所を、仮設住宅をと、地権者を訪ねて全国を飛び回っていた。彼から夢のある計画を描いて欲しいと言われ、「アジアを歩こう！」というテーマで、スニーカー製造の町の将来計画を描いた。しかし、実際には進行中であった中・高層住宅群が出来ている。

東日本大震災、2011年3月11日、発災の時、東京三田で日本建築学会理事会の最中であった。縦に大きくはずみゆっくりした揺れが長



く続いた、再度大きく揺れ、すでにTVでは津波の空撮中で、その被害が尋常なものでは無いことを察することができた。新幹線は止まり、彦根に帰ることは出来なくなり、東京縦断も断念し、翌朝になって東京目白の自宅に帰ることになった。その後は、以前に建てた福島県矢吹駅など、作品の被害状況を確認すると共に、東北支援のスタートを切った。2日後に彦根に帰り、東北への宅急便が再開された3月17日は彦根は雪の日だった。友人の藤村望洋氏の呼びかけで全国の商店街仲間の物資まとめ役を山形県の酒田市の商店街が手を上げてくださり、宮城県南三陸へ雪の山越えをして届けてくれた。その第一報は災害の想像をはるかに超えた甚大な被害の様子で、彼らは酒田に帰ると炊き出し用具を揃えて取って返して南三陸に向かった。それらは2011年4月29日の南三陸「復興市」に繋がり、さらにいち早く仮設復興商店街「南三陸さんさん商店街」と立ち上がった。2012年の夏に、2013年の3月には、花しょうぶ通りLLPひこね街の駅の「しまさこにゃん」も支援に行っている。

陸前高田では、ご自身も津波で家を流された吉田正子さんが、その夏にひまわりの畑を創り、高台の犬猫病院跡地に庭造りを始めた。そこには「希望の庭」が作られたが、2012年春にそこに民宿が作られる事が決まり、丘と庭ごとの花をご自身の敷地に移転する事が決まった。当初、「なんじゃもんじゃの木」を寄付にに行き、庭の出来たことを喜んだが、「庭は家があつての事なんですよ。」という吉田さんの一言から家を寄贈する事を決めた。8月の猛暑中のテラスづくりは、庭の移転作業と同時期にスタートした。その間にたった3坪でも敷地の最初の建物なので確認申請を出し、11月の寒波の中の家づくりと、柴田研の学生達が真摯に動いて、信頼を得ていった。その姿は、地元の方々に勇気と希望を与えていた。動けなかった吉田さんのご主人が、なにかしら手伝いを始めた姿に感動した。漆黒の闇の中に、「希望の庭の小さな家」は希望の光を灯している。リーダーの出口拓磨君はじめ、吉岡一弥君、服部康平君、呉竹佑介君、平井充君、藤田遼君、穴迫弘也君の諸君に心から感謝したい。

●首都直下地震への備え：都知事、衆議院選挙

2005年、「市民が学会と共に考える東京の地震防災」を開催した。市民と共に建築学会、土木学会と三者が、知恵とエネルギーの持ち寄りで、学会でのシンポジウムだけでなく、「ぼうけん探検隊」などのまち歩きなどを開催した。当時柴田研にいた井上洋一君がポスター、チラシを担当し好評を得た。これらは、きたるべき首都直下地震を迎え打つというスタンスで、2007年の都知事選、市町長選において、「都知事選各候補者への公開質問状と要請書、首都直下地震を考える有志の会：連絡先代表 柴田いづみ」として、さらに2012年の衆議院選挙においては、各党にも公開質問をしてきた。成果は、都にも災害や耐震に対しての委員会が出来、実際の東日本大震災の勃発により危機感が増したこともあり行政体制が出来てきたといえる。

●学生力と市民力



ACTは、Action Connect with Town（活動はまちと繋がる）の意味で、1998年、彦根市久座の辻の空きビルのシャッターを上げましょうというところから始まった。学生には「まちに何ができるか考えてください」、まちには「何が

できるか考えてください」と伝えてきた。2007年のビル売却になるまで、銀座光路、銀座画廊、ファッションショーと学生が自主運営で、カフェ、工房、イベントホールを運営してきた。学生が自主運営でまち場に拠点をもつことでは、全国でも初めての試みと言え、またその自主性が、継続にも繋がったと考えている。この場合は、市民も青年会議所もうまく活用できていた場所であった。

花しょうぶ通りで2000年から始まった「勝負市」は、ACTの学生と花しょうぶ通りのみなさんとの共動（柴田造語）の成果といえ、今は、滋賀県立大学、滋賀大学、聖泉大学の3大学の学生が関わる祭りとなった。

LLPひこね街の駅は、2007年、花しょうぶ通り、大学関係者、市民の仲間から発足した。「寺子屋力石」「戦国丸」「通信舎」の3ヶ所の「ひこね街の駅」を運営・管理している。寺子屋力石の耐震補強を含む「防災・耐震・まちづくりフォーラム」の活動に対して「耐震グランプリ・内閣総理大臣賞」をいただいた。他に「歴史・景観・まちづくりフォーラム」「歴史・景観・まちづくりネットワークの構築」と国からの事業費を得て、彦根市の防災計画や景観計画の

策定にも関わるフォーラムをしてきた。寺子屋力石は2011年1月2日に火事になり、耐震補強壁が耐火壁として機能し、活動の場所は守られたが、奥の座敷は消失してしまった。現在は全国からのボランティアのみなさんのおかげで、土土砂も撤去され、この地区が文化庁の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、本格的に補修工事が始まるまで仮補強をしてカフェ・ギャラリー寺子屋として営業されている。

近江八幡市では、市民主体で、2009年に「ウィリアム・メレル・ヴォーリズ展」を開催した。街なかのヴォーリズの足跡をたどる街を巡回する分散展示を提案し、学生達と展示会場づくりをした。その時に、以前から近江八幡で活動をしていた学生グループが、雨漏り町家をお借りし改装し拠点を整備し、正式にDIG'Sというサークルとして活動を始めた。地域資産を掘り起こそうという意味である。学生だけでなく、市民も曜日によって営業できるシステムを作っている。またリレートークとして、琵琶湖や近江八幡を知る機会を創り、子どもたちとのワークショップが継続し、キッズ学芸員を養成している。

●自然再生

1996年、赴任した秋に、当時の学長の日高敏隆先生から、津田干拓地についてのテーマをいただいた。1997年の環境フィールドワークから、末石富太郎先生、井手慎司先生と地元へのリサーチを中心とした授業を組立てた。学生からの提案は、「津田内湖の再生」であった。現状は、すでに農地として嵩上げが進んでいるが、当時は、「津田内湖を考える市民会議」、「近江八幡津田内湖リサーチコンプレックス」へ発展した。近江八幡においてのDIG'Sでは、2010年名古屋でのCOP10の公式エクスカージョンの海外からのお客様を相手に、学生が養成したキッズ学芸員が西の湖周辺の観察会で学んだ成果を発表した。どの活動でも「民・官・産・学+子供達」の共動（柴田造語）をすすめて来た。

●アートプロジェクト

全国で展開している「恋人の聖地」に、西日本高速道路の天津SAが選定されモニュメントの制作を依頼された。柴田のコンセプトと移動して変わるイメージと出口拓磨君の3D動画のプレゼン力、最後は服部康平君のデザイン力へのリレーでモニュメントが完成した。ニックネームを「結、you + i」とした。「結」は、次の3つのテーマをイメージしてデザインされている。①「メビウスの輪」：相



手の心（ハート）の表面も裏面も理解しあう。②結（ゆい）：恋人同士の心の糸が、固く結びつく。③「you + i」：あなたと私がお互いに相手の心を必要としている。

4月から「柴田いづみまちなか研究室」「結のまちづくり研究所」を立ちあげるが、その結とも連動している。「you + i」は、友愛になる。

●おわりに、フランス留学

「アンドレア・パツラーディオ、そのフランスにおける影響」は、フランス政府給費留学生としてパリで4年を過ごした最後の論文で、これにより、D.P.L.G.（フランス政府公認建築家）の称号を得て帰国した。パツラーディオは、後期ルネッサンスの建築家であるが、その影響は、「建築四書」によって、アメリカにおいては第3代大統領のジェファソンや20世紀初頭まで世界の建築に大きな影響を及ぼした。イギリスの建築家、イニゴ・ジョーンズが持ち帰ったパツラーディオのオリジナル図版はロンドンの王立建築家協会に収蔵されている。私の研究は、それらの資料とパリの国立図書館、古文書館での資料を比較しながら、フランスにおける影響を調べてきた。留学前にすでに一級建築士の資格もとり、「柴田いづみ建築設計」として事務所も開設していたので、1986年に帰国後すぐ建築家として再開し、同時に執筆活動を始めた。ちょうど、パリオペラ座、ローリンマゼール指揮のオペラ映画「ドン・ジョバンニ」（モーツァルト）が日本公開され、プログラムに原稿を依頼された。映画の中で、パツラーディオの建築作品が多くの場面の舞台として使われていた為である。

大学に赴任する前には、産経新聞に、半年間コラムを書いていた。それらは、専門的な意見も含めた一般的な内容で、世界のまちづくりの事なども書いていた。

今、振り返ってみると、留学時代の歴史的なことから、インテリア、建築、土木、ランドスケープ、そしてまちづくりのハードからソフトへと幅広い分野、そして教育という人づくりまで関わりあえたのは、幸せな事だと思う。すべての関わりあったみなさまに感謝したい。